

# 芳泉中発未来へ

「生きる力」を育む教育をめざして

平成29年9月  
芳泉中学校  
学校だより

## 二学期のたくさんの方の行事を通じて、「学校」・「自分自身」・「お互い」を磨いていきましょう。

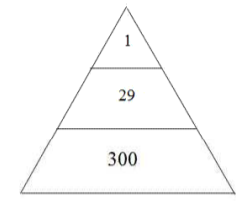
九月一日（金）は二学期の始業式でした。式の冒頭、正本校長先生から、二学期の過ごし方について、次のようなお話がありました。

「二学期は体育会や文化発表会をはじめ、たくさんの方の行事が目白押しです。今年一年間、生徒の皆さんにキーワードとしてお伝えした三つの「磨く」（学校を磨く・自分自身を磨く・お互いを磨く）の実現に向けて、日々の地道な取組を大切に毎日を通じてほしいと思います。特に、三年生の二学期は進路決定の重大な時期でもあります。是非、自分の意思で進路を決めて、入試に向きあってください。忙しく、楽しい、充実した二学期になるよう頑張ってくださいませよう。」

生徒の皆さんは、是非とも一つの活動場面で自分にとって有意義なものになるよう、取り組んでください。

一つの重大事故の前には、それにつながる三万件以上の「ヒヤリ」と「ハツと」があると言われています。

始業式の後、生徒指導主事の黒瀬先生から、一つの重大な事故の陰には、それまでに二十九件の極めて重大な事故につながる可能性がある状況が起こっており、その陰にはさらに軽微な三万件の「ヒヤリ、ハツと」するような状況が起こっているという、いわゆる



「ハインリッヒの法則」を用いた指導がありました。

平成二十九年八月の岡山県内の交通事故による死者は十三名、前年度の六・五倍という深刻な状況で「死亡事故警報」が発令されました。芳泉中学校の生徒の間でも自転車の運転中や歩行中の「ヒヤリ、ハツと」がしばしば起こっているようです。

交通事故の多くは、自分が交通规则を正しく守り十分な注意を怠りさえしなければほとんどのものを防ぐことができます。自分の未来のためにも、家族のためにも、安全な毎日が過ごせるよう、十分に気をつけてほしいと思います。

## ALTの先生方、ようこそ芳泉中へ！

二学期から二人の女性のALT（アシスタント・ラングエッジ・ティーチャー）が英語の授業をサポートしています。二人の先生は、ハーディー・カー先生とタシカ・マッカーシー先生で、ハーディー先生は、インドのパンジャブ地方の出身、タシカ先生は、あのウサイン・ボルト選手と同じ、カリブ海に浮かぶ島国ジャマイカの出身です。（地図で場所を調べてみましょう。）

二人とも日本の学校は初めてですが、あらかじめ日本のことを来日前によく勉強されており、日本の教育や社会・文化にとっても興味を持たれています。芳泉中学校の活動の中では、生徒が自分たちで、昼食を運んで、配膳し、食べて、片付けるといった一連の「給食の時間」の様子が大変印象に残ったようで、「教室で自分たちという教育が、やがて、よりよい町づくり、国づくりへつながっていくのだから」と、感想を述べられています。

二人の先生とも、生徒のみならず積極的にコミュニケーションを取って行きたいと希望されているので、気軽に「こんにちは」、「Hello. How are you?」と声をかけて、会話を楽しくしてくださいね。

## たくさんの方の生徒がボランティアを通じて様々な人たちと交流を行っています。

芳泉中学校では、たくさんの方の生徒が地域のボランティアに参加しています。例えば、夏休みの前に募集を行った岡山市社会福祉協議会等による「夏のボランティア体験事業」には、本校から百七十九名の応募がありました。活動先は、福祉・医療関係の施設や幼児教育施設が中心で、どの場所でも熱心に生徒が活動を行いました。

また、図書委員会とボランティアの生徒による芳泉小学校、及びひばり分校の児童に対する読み聞かせ活動や、生徒有志による「浦安ふれあい夏祭り」の出店ボランティアなどでも生徒達の熱心な活動がみられました。



特に、浦安ふれあい夏祭りではダンス部の生徒が「うらじや」に参加したときの踊りを披露したほか、出店のボランティアには二十五名の生徒が参加し、中学校PTAの非行防止対策部のサポートも受けながら地域の子ども達を対象とした射的と輪投げのコーナーの運営にあたりました。当日の来店者は、初参加の平成二十三年度以後最高の五百八十八名で、午後六時の開店から午後九時の閉店まで順番待ちの長い行列が途絶えることなく、生徒達も声を張り上げて地域の子ども達に来店を呼びかけ、祭りの盛り上がり大いに貢献しました。

浦安地区のPTA関係の方々も、「上級生のこのような熱心な姿を見て、後輩達が地域の活動への参加の姿勢を受け継いでくれたらいいですね。」と、中学生ボランティアの活動を微笑ましく見守っておられました。

関係では、県ソフトテニス選手権大会男子個人戦で小倉光騎・太田智人さんのペアが第二位の成績を収め中国大会に進み、卓球競技では藤本瞬太郎さんが県予選を通過して中国大会に出場しました。

続いて、中文連の関係では、岡山県吹奏楽コンクール中学校B部門で最優秀賞、同A部門で金賞を受賞し、中国大会では銀賞を受賞

## 祝！走り高跳びで吉富聖矢さんが全国4位の快挙

夏休み前からは、多くの部活動で県大会、中国大会、全国大会へと続く中体連・中文連主催の大会の予選が繰り広げられてきました。その結果、中国、全国レベルの入賞という快挙が本校生徒によって達成されました。

夏休み後半に開催された市総体では、バドミントン男子団体戦で芳泉中学校チームが初優勝を果たし、さらに男子シングルス（三年生を含む部）で西川卓さんが優勝するなど、この夏は、多くの競技で芳泉中学校の生徒・チームの活躍が目立ちました。

まず、陸上競技走り高跳びの部門では、本校第三学年の吉富聖矢さんが、県大会と中国大会をいずれも第一位で勝ち抜き、全国大会への出場を果たしました。そして、熊本市で開催された全国大会では、予選では1m90cmをクリアして決勝に進出し、決勝では1m87cmの記録で第四位入賞を果たしました。この素晴らしい快挙に心から拍手を贈りたいと思います。

中体連・中文連関係以外の大会でも、全国中学校ダンスドリル選手権大会の三つの部門でダンス部が第一位を獲得したほか、全国中学校ウエイトリフティング選手権大会では瀬尾佳菜子さんが五十八kg級で第三位に入賞しました。

また、水泳競技の部では、中国大会男子二百mバタフライ決勝で、杉山拓馬さんが二分十七秒八四の記録で第七位入賞を果たしました。さらに、中体連の大会

それぞれ部活動や競技種目で生徒達は、日々熱心に練習を重ねています。顧問の先生方も、様々な壁に突き当たりながら、よりよい指導を目指して歩んでいます。保護者の皆様には部活動へのご理解・ご協力とご支援を今後とも是非よろしくお願ひします。



また、中国大会男子二百mバタフライ決勝で、杉山拓馬さんが二分十七秒八四の記録で第七位入賞を果たしました。さらに、中体連の大会

# 学力・学習状況に関する調査の結果から、生徒、学校、家庭、地域ができること

夏休みの期間中に、岡山市学力アセス（第一・二学年対象）、及び全国学力・学習状況調査の結果が学校に届きました。各学校ではこの結果を分析して、授業の改善等の取組を行ったり、次年度の教育課程の編成に生かしたりしていきます。各学校における分析や課題は、共通の書式により岡山市教委のホームページで公表されることとなっています。

## 「基礎」という言葉をとらえ直してみる ↓生徒と学校

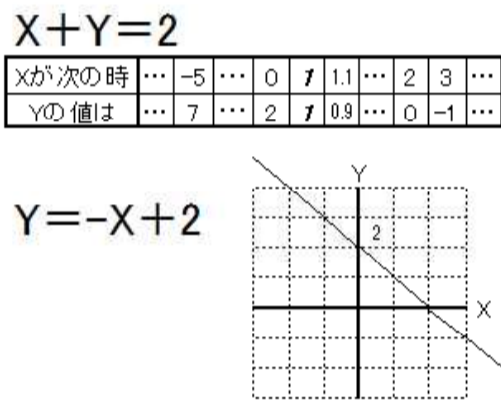
左の表は、本校の第一学年、二学年の学力アセス（Ⅱ学力診断テスト）の結果から、学校として大まかにとらえた成果と課題を表したものです。生徒や先生は、この概要を見ながら、これまでの学習の仕方や授業の在り方を自己評価していく必要があります。

芳泉中学校は、落ち着いた学校の環境を反映して、全体的には学力の状況は上向きに推移していますが、保護者の立場からすれば、我が子の学力の課題」に対して、きめ細かく先生方に向き合っていると思えることを期待されていると思います。そこで、ここでは「二年生を対象に実施された「岡山市学力アセス」の分析をもとに、生徒自身、学校、家庭、地域が「学び」にどのように向き合っていくべきかを考えてみたいと思います。

「基礎」という言葉をとらえ直してみる。左の表は、本校の第一学年、二学年の学力アセス（Ⅱ学力診断テスト）の結果から、学校として大まかにとらえた成果と課題を表したものです。生徒や先生は、この概要を見ながら、これまでの学習の仕方や授業の在り方を自己評価していく必要があります。

国語	○文章の意味などを読み取る力は比較的よく定着している。 ▲漢字の書き取りや要旨を文章でまとめたり表現する力に課題がある。
社会	○歴史的な出来事や文化など基本的な用語についてはよく身に付いている。 ▲出来事を背景や他とのつながりを含めて理解すること、資料を活用して思考・判断を行うことに課題がある。
数学	○基本的な計算力や公式を使って面積等を求めたりする力はよく身に付いている。 ▲問題文から式を作ること、式の意味を理解し言葉で説明することなどに課題がある。
理科	○物質やエネルギー、植物の作りなど基本的な名称や規則性は正しく理解している。 ▲グラフから関連性を読み取ることや、法則を用いて答えを出すことに課題がある。
英語	○聞いたり話したりすることや、基本的な単語の習得はよくできている。 ▲対話文や説明文を読んで、内容を把握したり作文する力に課題がある。
学習状況	○授業を大切に、提出物、課題等にきちんと取り組むことができている。 ▲知識を覚えるだけでなく、思考・判断・表現に関連付けるような「負荷のかかる」問題への取組に課題がある。 ▲家庭でのゲーム等に費やす時間のコントロールを行う必要がある。

て言うと、「 $X + Y = 2$ 」という式が示された時に、「 $X = 1$ 」ならば「 $Y$ は何か？」だけを単純に考えれば「 $Y = 1$ 」で終わりですが、これを数の「範囲」を小数や負の数に広げていくと、その組み合わせは左表のように無限に存在することが分かってきます。これが一次方程式の「解」の意味となります。また、同じ式を「 $X$ 」の値が変わると「 $Y$ 」の値もそれに伴って変化する」とものと見ると、「 $X$ 」と「 $Y$ 」の間には関数の関係が成り立っていることが

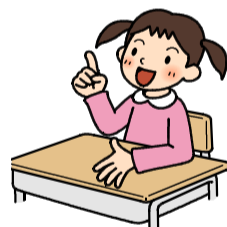


分かります。それらのことが理解できてはじめて一次方程式や一次関数の式やグラフの関係性が分かってくるといえます。

これらのことから学力向上のヒントを提示するならば、暗記中心の表面的な記憶や理解だけでは「基礎」の力が付いたとはいえないので、「なぜそうなるのか」など、自分で友達に説明できるようにするまで理解を深めてほしいと思います。ただし、「なぜそうなるのか」ということが理解できるまでには、「十分に考える時間」が必要です。授業中に「まだ理解できていない」と感じたときには遠慮なく先生に質問してほしいと思います。

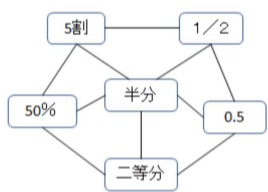
## 「表現形式の違い」や「条件付きの記述」に慣れること

自分が分からない所と同じ箇所を分らないでいる友達ばかりと何人もいるはずですから、恥ずかしがらずに質問しましょう。



近年の問題の傾向として「活用問題」の複雑なものが増えていることがあり。分析の表でも、文章と式が組み合わされたような問題に苦手意識を感じている生徒が多いということが読み取れますが、その前に、同じ意味の言葉が違う表現で記されたものに惑わされているケースがないかどうかを自己点検してみることも必要でしょう。

例えば、数学では、「半分」の概念は、「0.5」「50%」「二分の一」「五割」「二等分」など、同じ意味で異なった表現で記されることがあります。数学に苦手意識を持っている生徒の中には、そこで混乱するケースもあります。文章から式などを立てるような問題では、文章で表された内容を、直接「式」に変換するのではなく、図を用いて



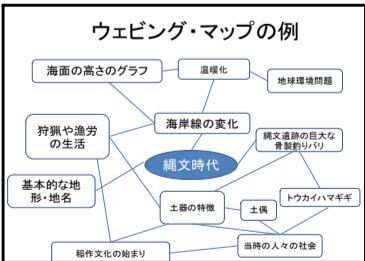
整理してから「式」に変換する手順を習慣化することも解き方が分かる近道になるでしょう。また、記述問題でよく見られるのは、「条件」が与えられているものです。例えば、「二百字以内

## 「セルフ・コントロール」の支援、「幅広い体験による視野の拡大」↓家庭と地域

で「○○と○○の語句を用いて」「○○の立場に立って」「根拠を示しながら」などがそれにあたります。こうした傾向への対策としては、「生活ノート」などで日々の記録を、「条件付き」で書くことを自主的に心掛けるなどの取組も考えられるでしょう。

家庭や地域ではどのような学力向上へのサポートができるでしょうか。家庭での子ども達の過ごし方での大きな課題は、言うまでもなく「メディア・コントロール」です。

芳泉中学校の生徒の家庭でのゲーム等の状況を「二時間以上ゲームをしているかどうか」という観点から見てみると、今年度を含めて四年連続ですべての第三学年で全国平均よりも高い割合を示しています。



中学生がゲームに向かう理由は、単に「面白い」「楽しい」というのが大半でしょうが、もうひとつ見逃せない要因に「逃避」という「自分を守る行動」があります。「今まで自分の部屋の掃除をしたことがないのに中間考査が近づくと急に片付けがしたくなる」のは、「中間考査の発表があるとなぜか無性にゲームがしたくなる」と同じ「逃避」という心理的な動きで、人間なら誰にも備わっているものです。こうしたことに對しては、「気が散るものを目の前からなくす」「とりあえず机の前に座る」「食事・勉強の時間を

一定にする」など、生徒自らがセルフ・コントロールを行い、それを家庭がサポートすることが大切です。また、「家族の対話」も子ども達の表現力を高めます。子どもが成長するにつれて、言葉の数が増えて表現力が向上してくるので、それをしっかり観察して言葉の力の成長を子どもに伝えてあげることが大切です。

授業の中では、ウェビング・マップといって、一つの言葉からだけ関連したことがらを結びつけられるかというような学習をすることがありますが、子ども達の「どのような「どうして」など、」と「どのよう」な「どうして」など、」のような「どうして」など、」も作っていただけるとよいのではないのでしょうか。

地域の方も子ども達の学力向上に役立てることが出来ます。子ども達が「視野を広げる」ことは、「感性」の幅を広げ、情報の中から「自分にとって意味あるもの」を選び取る力に付けさせます。これからの「生きる力」を支える三つの柱は、「何を理解しているか・何が出来るか」「理解していること・できることをどう使うか」「どのよう」に「社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」ですから、地域の行事やボランティアなどで子ども達が積極的に「社会・世界と関わる機会」を提供していただけることは子ども達にとって大変ありがたいことといえます。

生徒自身、学校、家庭、地域が協働して子ども達の「学力」そして「生きる力」を育んでいきましょう。